



ななほ  
茂呂 奈々帆さん

●南中学校 3年

夢を叶えるために

私は将来、人を支える職業に就きたいと考えてきました。

私は中学の2年間を生徒会本部役員として活動してきました。笑顔のあふれるより良い学校を目指し、尊重し合い、団結し、問題点を話し合うことで、さまざまな目標を達成してきました。そして、人と人とのつながりが何よりも大事であり、そのような多くのつながりが生まれる学校という場の大切さを学びました。

今の私の夢は教師になることです。そのためにもこれからたくさんの方を経験し、学び、自分自身を磨く努力をしていきたいと思えます。



## 市長からの

## メッセージ

落ち葉が風に舞う季節となりました。

先月11日には、佐野市制10周年記念式典が開催され、多くの来賓の皆様にご出席いただきました。式典の前のアトラクションでは「下彦間郷土民芸保存会」によるお囃子、「SANNOブランド」によるステージが行われたほか、サプライズゲストとして登場した佐野ブランド大使「ダイヤモンド☆ユカイ」さんによるステージや、本市の親善都市・彦根市のキャラクター「ひこにゃん」からの花束贈呈があり、会場は大いに盛り上がりました。また式典の中で、昨年度、没後百年を記念し制定いたしました田中正造記念賞の表彰式を行い、市内外の4団体を表彰いたしました。

さて、今月3日から8日までの6日間、姉妹都市であるアメリカ合衆国ペンシルベニア州ランカスター市を「佐野市訪米団」が訪問いたします。ランカスター市とは毎年中学生の交流事業、ALTの招致などを行っておりますが、今年は姉妹都市締結20周年の節目の年でもあり、私も「さのまる」と共に初めて参加いたします。ランカスター市長を表敬訪問するほか、ニューヨークの栃木県人会などを訪問し、友好親善の推進を図ってまいります。

秋は芸術の季節でもございます。今月1日から12月14日まで、吉澤記念美術館において、解体修理が終了し、鮮やかな色彩を取り戻した「伊藤若冲」の『菜蟲譜』(国の重要文化財)が、前半部分、後半部分で期間を分けて公開されます。また今月1日から23日まで、佐野厄よけ大師境内では、昭和4年から続く伝統ある「関東菊花競技大会」が開催されます。色とりどりの見事な菊が境内にあふれます。

本市ではさまざまな文化芸術事業が実施されます。皆様もぜひお出かけください。

岡部 正英



### 今回の表紙 「佐野市制10周年記念式典」10月11日(土)佐野市文化会館

10月11日、佐野市制10周年記念式典が文化会館で開催され、市関係者や来賓など約1,200人が出席し、節目の年を祝いました。

式典の中、市歌斉唱の際には、佐野ブランドキャラクター「さのまる」が見事な指揮を披露しました。



きょうや ひろじ  
京谷 博次さん  
(堀米町)



キラリ★  
話題の「ひと」

○プロフィール  
安蘇史談会会長。  
佐野市史、田沼町史、藤岡町史、西方町史などの編纂事業に関わったほか栃木県立文書館に勤務。  
著書に『佐野周辺みてある記 わが町散歩』。

温故知新  
楽しく郷土史を学ぶ

今回ご紹介する京谷さんは、郷土史家として活躍されています。現在は、江戸時代、旗本であった佐野氏の知行地である足利市寺岡、栃木市岩舟町下津原、神奈川県寒川町、兵庫県丹波市氷上町の旧名主宅で所蔵された佐野氏に関する古文書、数十点を翻刻中のほか、30年ほど前に刊行した『わが町さんぽ』の改訂版を執筆中だそうです。

「安蘇史談会」という名前を聞いたことがある方も多いと思います。この会は、昭和59年の1月から2月にかけて、佐野市のユネスコの青年部が、京谷さんを講師として開催した「安蘇の風土と歴史」を契機としています。この際の受講者が呼びかけ、12名の賛同者が集まり、同年4月に、安蘇史談会が結成されました。

「史談」は郷土の歴史を楽しく談じようという趣旨で命名され、今年で結成30年。「安蘇地域の郷土史に興味や関心がある方の参加をお待ちしています」と、会長である京谷さんは笑顔で話されていました。

史談会では年に1回、会報「史談」を発行しています。この会報は素人ゆえの着想など、専門家の盲点を突



安蘇史談会の講座で、受講者に話す京谷さん

く鋭い発想が見られる自慢の本です。これまで佐野氏、唐沢山城址、天明鋳物、例幣使街道、田中正造翁など、多くの論文が投稿されています。

また毎年自主講座「安蘇の風土と歴史」を開催しており、今年4月から5月にかけて城北地区公民館で計6回開催されました。延べ598名もの参加があったそうです。

他にも会員同士で研修旅行を行っており、最近では水戸市の「弘道館」や北茨城市の「岡倉天心記念五浦美術館」に行ってきたそうです。

会員たちと郷土史を学び、史実を詳らかにしていく京谷さん。京谷さんの訥々とした語り口からは、真摯な人柄が伺えますが、実はユーモアあふれる楽しい方です。京谷さんとともに、ぜひ郷土史を学んでみてください。 (市民記者 佐藤 久夫)

佐野弁  
ばんざい

ショックで寝込んでしまう  
ことをモッコヤミという

突然、大きな音を聞いたとき、あるいは事故などで多量の出血を見たときに、その驚きや激しい衝撃で足腰が立たなくなってしまうことがあります。これを「腰が抜ける」といいます。このような状態は比較的短い時間で正常な状態にもどるのが普通です。ところが、恐怖による精神的な強いショックを受けると寝込んでしまうことがあります。山に行つて大きな蛇ににらまれ、その怖さや、あとで蛇の祟りがあるのではないかと思つて、寝込んでしまったという話があります。明治・大正の人たちは、恐怖と祟りによって生じる病をモッコヤミ、あるいはモツケヤミといっていました。今でも強いショックを受けて寝込んでしまうことをモッコヤミといっています。

「えたいのわかンネー、ウスキビワリー(なんとなく気味がわるい)男がいるんだよ。コナイダ(先日)その男を山の中で偶然見かけたんだけど、わたしをじーっと見てるんで、怖くなって足がすくんじやつた。そのショックでまる二日間もモッコヤミしちゃったよ」(農家の主婦の話、40年前)

モッコヤミ(モツケヤミ)の「モッコ(ケ)」は、昔のことばの「ものけ(物の怪)」が訛つたものです。物の怪とは、人にとりついて悩ましたり、病気にさせたり、ときには死にいたらしめる生霊・死霊などです。[物の怪病み]が変化してモッコヤミとなりました。 (市民記者 森下喜一)

